

## 家族をめぐる天理教の教え

おやさと研究所教授  
堀内 みどり Midori Horiuchi

「みんなママがいるように見えるよね。でも本当はママしかいなかったり、パパしかいなかったり、おじいちゃんおばあちゃんしかいない子もいるんだ。家族ってのは、お互いに心配しあう人たちのことを言うんだよ」（ドラマ『フルハウス』ママがいないことでからかわれた末娘へ）

### はじめに

世界宗教といわれるキリスト教、イスラーム、仏教には、それぞれ開祖と呼ばれる人がいる。その人たちの家族をみると、イエスには、養父・母・兄がいたとされ、彼自身は独身だった。ムハンマドは、両親が亡くなったあと叔父に引き取られ、複数の妻をもったとされる。また、ブッダは小国の王位継承者でありながら、父・養母（実母の妹）・妻、子という家族や財産、皇子という地位を放棄して出家した。

ところで、イエスは、「(夫婦について) 彼らはもはや、ふたりではなく一体である。だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない」と説きつつ、同時に「わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍も（天国で褒美を）受け、また永遠の生命を受け継ぐであろう」（マタイ福音書 19 章参照）とも語っている。人には誰しも、自分の生まれた家庭があり、そこには家族がいる。イエスは夫婦とは神によって合わせられたものであるから、離してはいけないと言いつつ、イエスの信仰を受け入れるために、家庭や家族を捨てることを肯定する。つまり、ここからは家庭や家族は、個々の人にとって、「固く結びついた人間」であって、「捨てがたい」ものであるといえるだろう。

では、私たちが、「理想の家族」あるいは「家族の理想」を思うとき、そこには、たとえば、「正しい家族」というような「理念」「社会の通念」として語られ、「社会の規範」が反映されることがある。「普通の家族」「当たり前な家庭」が、いわゆる「標準世帯」を指すこともある。そして個々人の「希望」の家族像がある。しかし、そうした理念や希望によって表象される家族は、それぞれの民族伝統（国）、歴史や文化、変化する社会の中で、家族のあり方や形態に影響されてもいる。日本の家族は、先祖祭祀（ご先祖様／身近な先祖）に特徴があり、子孫の継続・血縁・地縁が大切だと考えてきたとされる。現代においてしばしば語られる愛をもとにした絆や安らぎの場としての家庭は、夫婦を基盤としている。

### 原典の中の家族（親・子／ふうふ／きょうだい）

「おふでさき」には、人間はどんなに身近な者同士であっても一人ひとりの心は違うものであるが、神の仕込みや教えは「親子」に代表される家族という特別な人間同士の関係を通して実現していくと教えられる。それは親が子どもを可愛いと思う心が基盤となる。なぜなら、人間はすべて神の子どもであって、「一れつのこどもハかわいばかり」という親神の思いが反映しているからである。

をやこでもふうへのなかもきよたいも  
みなめへへに心ちがうで （五号 8）  
子のよなきをもふ心ちがうでな  
こがなくでな神のくときや （三号 29）  
をやへの心ちがいのないよふに  
はやくしやんをするがよいぞや （三号 31）  
このこ共二ねん三ねんしこもふと  
ゆうていれども神のてはなれ （一号 60）  
しやんせよをやがいかなほどもふても  
神のてばなれこれいかなはん （一号 61）

にんけんのハがこのいけんをもてみよ  
はらのたつのもかはいゆへから （五号 23）  
こんな事なにをゆうやとみなのもの  
をもうであるふこどもかはいよ （十一号 47）  
にんけんも一れつこともかはいかる  
神のさんねんこれをもてくれ （十三号 27）  
にんけんもこ共かわいであるをがな  
それをふもをてしやんしてくれ （十四号 34）  
このはなしとこの事もゆへんでな  
せかいちううハみなわがこやで （十五号 68）  
一れつのこどもハかわいばかりなり  
とこにへたてわさらになけれど （十五号 69）

また、「みかぐらうた」には、「ふうふ」が「このよのはじめだし」であるので、そのような夫婦が揃って「ひのきしん」という働き方をするように教えられる。

このよのぢいとてんとをかたどりて ふうふをこしらへきた  
るでな これいこのよのはじめだし（II）  
ふうふそろうてひのきしん  
これがだいよちものだねや （11 下り目 2 つ）

さらに「おさしづ」には、平易なことばでより丁寧な教示がある。「小人の障り、親の心案じある故、映る事なり。」（20. 6. 6）

「これまでをやが皆通り来たる道、聞いても居る、見ても居る。皆談じ合うて通りてくれ。……親が怒つて子供はどうして育つ。皆、をやの代りをするのや。満足さして連れて通るが親の役や。」（21. 7. 7）  
「今までは親子の契りも結び、繋ぎ来たるなれど、さあへめんへに心通りに通してやる。……十五才までは親の心通りの守護と聞かし、十五才以上は皆めんへの心通りや。」（21. 8. 30 < 7.23 > 夜）

「いつもいつまでも親の厄介になる者はどんならん。」（22. 1.24<12.23>）

「これ夫婦いんねん見て暮らす、見て通るいんねん、」（24. 3.22）  
「身に切なみ、いろへの理拵え、夫婦とも日々々に尽す、日々の理がある。」（27. 6.28）

「夫婦の中切れたという。夫婦の縁は無くとも互いへ兄弟という縁は結んでくれ。」（28. 5.22 朝）

「夫婦の中たんのう一つの理、互いへとも言う。……この一つの理は将来の心、」（30. 7.19）

このように、家族という関係は“治まる”（救い）ためのユニットだと教えられる。それは家族という人間の関係で人として互いに育てられていくことでもある。だから、長らくの先を楽しみに、互いに満足させ合いながら、仲好く暮らすのである。互いに、いんねんを見て、聞いて暮らすなかにたんのうが可能となる。親の役とは「をやの役」である。そして15歳までに自律して教えを求め、いんねんが自覚できるよう育てよう諭される。これは、信仰を末代へと繋ぐことでもある。「おふでさき」では、「せんしよのいんねんよせてしうごふする これハまつだいしかとをさまる」（一号 74）と歌われる。

### まとめにかえて

生まれてくる「いのち」は大人の世話取りなしでは生きられない。どのように家族の形態や構造が変わっていくにしても、子どもはその家族の中で成長する。だからこそ、「をやの役」また「をやの思い」は、人が「生老病死」を生き抜き出直すための教えとなるだろう。「ようぼく家庭」「教会」のはたらきを世に映していくとき、そこには「きょうだい」（人はみな可愛い神のこども）という在りようを映し出すことが期待される。